

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

ねずみの角力とり

佐藤家の昔話（十二）

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

ねずみの角力とり

佐藤家の昔話(十二)

編 武 田 正

ねずみの角力とり

佐藤家の昔話(十二)

1	泳ぎの名人
2	狐のお産
3	江戸の銘木屋
4	養老の滝
5	ねずみの角力とり
6	旦那と小作
7	先生の手紙
8	もぐらもち
9	ぶいろめの由来
10	シャクシ小屋の由来
11	虎の皮
12	長生きの盃

5	7	9	11	13	16	22	26	28	30	30	34
---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----

猶下雜記

佐藤家の昔話十一集について

民話と発達観について

49

46 38

凡 例

- 1 テープにとったものの忠実な翻字である。
- 2 語りの順に配列した。

なお、「民話と発達観について」は国民教育研究所の求めに応じて書いたもので未発表であるが、御批評いただきたいと考え、註を付してガリ版にしたものである。

1 泳ぎの名人

486

むかし、あるところに、すばらしい泳ぎの名人がいた。して、水連にかけては拔群で、拔手を切ったら、まず日本一で言っだえらい人がいだったど。

その人さ、むかし、侍なり町人なり、百姓から、皆ほの奥儀ていうな、なかなか明かさねがった。んで、

「今年もう三年もなるんだ。先生、何とか絶対おぼれないという奥儀を教えてください」

て、こういう風に言うた。ほしたら、

「んだら、明日こい」

て言うた。次の日行ったらば、あんまり遅いくて駄目だて言うた。

こんどは、「ほんでは……」ていうわけで、早く行ったらば、こんどは、

「早すぎて駄目だ」

て、なかなか教えない。

「んだら、何時ごろええがんべ」

というわけで、ちょうど早くも遅くもないように、夜中の十二時ごろ行つた。したら、

「お前はよく十二時ごろ来て呉^けだから、んだらば、今日は絶対に溺れないという奥儀を教えてやる。世の中には、この〈ぜったい〉てつけば非常にむずかしいもんだ」

ほして、

「筆と墨もってこい」

というて、筆と墨もって来^こらせて、そしてクロコブシんどこさ、線をひいた。そして、

「ここより深いどこに行かなければ、ぜったいに溺れない」
というたど。どんぴんからりん、すっからりん。

2 狐のお産

487

むかしとんとんあつたずま。

ある田舎の五、六軒しかない部落に、非常に子産^なさせの上手な産婆さんがいたつた。

ところが、ある晩、

「難産したから、取上げてもらいたい」

て、四、五人して迎えに来た。ほして何だか道の狭いようなどこ、どこことなく連れて行がっで、そして何だか人家でないようなおかしいところもあるもんだと思つて、ずうつと行つたつて。したればやっぱりその産婦が非常に苦しんでいだつて。

ほして、日ごろ慣れた手つきで、首尾よくほの難産取上げて呉^けだ。ほしたらば、「いやいや、おかげさまで、まず、取上げてもらった」

というわけで、ほして、何がしの御馳走になつて、ほしてたくさんお金頂戴し

て送ってもらつて来た。途中まで来たれば、ほの送つてきた人が、

「ここで勘弁して呉らっしゃい」

ていうたつて。

「なしてだ」

ていうたらば、

「村さ行くど、犬いっから、犬恐つかなくて、とても行かんねがらお願いします」
ていうて、途中から帰つて行つた。家さ来て見たれば、何だ体中きつねの毛だらけだったど。つまり、ほの狐のお産さ行つたんだつたど。

「んだらば、狐では、貰つた金は木の葉だべ」

ていうわけで開けてみろつていうわけで、金あけてみたれば、どっから集めてきたか知しやねげんども、木の葉どころか大判・小判だった。その家は今でもそのときから、それを種銭たねせんにして米買つて売つたりして、金持になつたていうて、狐に金持にしてもらつた家だていうの、後あとまで話に残つたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

3 江戸の銘木屋

488

むかしむかし、江戸で大きい材木屋あった。

ほこさ、田舎から出て行った徒弟で、とても働く、普通の人と働き方がちがう若衆がいた。そしてそれが働いて旦那から、いよいよもってノレン分けしてもらった。

ノレン分けしてもらうと、心掛けがええもんだから、常日頃、ええ材木来つどそれ売らないで残しておいた。樺、黒柿、それに紫タン、黒タン、こういう銘木は銘木で別にとってで、一般材料として売らなかった。

して、ある時、その人が田舎中廻って歩いて、疫病の神という疫病の神、みな集めて行つた。大概、昔は村はずれあたり、村の入り口あたりにある疫病の神、見ただけでも疫病うつるなんて、あさつてのほう向いて、鼻のおさえて、走って歩いた時代だった。

ところが、ほの人は、

「いや、疫病の神さま、ほっつの疫病の神さま」

ていうわけで、疫病の神、みな集めて行つた。ほして自分の工場さ飾つて、疫病の神祭りはじめた。これは誰が入つてもええていうわけで、開いたわけだ。

ところが、

「そういう疫病の神なら、見てみだい」

ていう、物見高い江戸の連中は、わんさわんさと入つて行つた。ところがその中には、目の暗い人ばかりでない。目の明るい人もいて、

「いやいや、こつちには、櫂の玉木たまもくがある。こつちには黒柿のウズラ木もくだ、こつちは紫タンだ、黒タンだ。これは唐木から銘木、タガヤサン、すばらしい木ある」

ていうので、それが目に止つて、大もうけしたつたて。

んだから、木カもっンという人なんだけれども、結局その人が、疫病の神で大もうけしたつたて。人間も人と一風変つたやり方しねど、いつの時代も金もうけていうな、おぼつかねもんだつて、先に、言うたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

4 養老の滝

489

ある山間避地というか、ずうっと山奥に、おつつあんと息子だけ暮していった。

ところが、ほのおつつあんが病氣して、息子が、ほこらこらから薪集めて売って、細々ながら暮してだ。ほんでほのおつつあんが病氣してでも、なえったて酒好きで酒飲まねでいらんねがった。んだから酒屋さ行つて、ほれ、自分の食いのつめても、酒飲ませる若衆だった。

ところが近所の山には、すでに薪もなくなつた。若いもんだから、
「んだらば、二た山も越して、向うの大きい山さ行つたらば、薪、うんと落つて
るでないか」

て、ほこさ行つてみた。ところがほこには薪がいっぱいあつた。

「よし、ここで一勝負して呉つけましよう」

て、薪一生けんめい拾つて来つと思つたら、ほの、足滑らかして谷さ落つて行つ

た。ほして何時間おもったものやら、朝の冷氣で、はっと気付いてみれば、沢こさ落つていだっけはあ。

ところが、ほの沢こさ降^おつで見たれば、何となくすばらしい香りがしてくる。沢の方から、何だべ、鼻ひくひくさせてみれば、酒の匂いだ。

「はあ、こりや、酒の匂いだ」

というわけで、その匂いする方さ行つてみれば、こんこんと湧き出でて、ほつから流つで滝をなしていた。して、ほの滝壺からフクベン汲んで、家さ来て、おつあんさ飲ませた。ところがほの酒のうまいことつたら、まずこたえらんねようだし(うまくてうまくて何ともいえない)、今まで腰も立たねようなおつつあんが、たちまち元気になった。ほして、こんど、ほれ、その話がずうつと、そっちこちさ広がって、京の都までひろがって行つた。ほして、年号を養老と改めて、その滝ば「養老の滝」というた。ほしてその息子とおつつあんも、こんど働けるようになったから、二人して働いて、らくらく暮したけど。どんぴんからりん、すっからりん。

5 ねずみの角力とり

490

むかしむかし、あるところに、じんつあとばんちやいだった。

ところが、ほのじんつあとばんちや、なんぼかせいでも根があまり正直なもんだから、もうけらんなくて、言うたら、貧しい暮しだった。

て、ちやうど、隣にすばらしい長者さまいて、金持ちで、働いたこともなく金持ちだった。おかしいこともあるもんだなて、いた。

そしてある時、山さかせぎに行つたれば、ほこでねずみが角力とりしつたけど。

へよいしよ、よいしよ〜て。ほうしたけあ、ほのやせねずみと太^{こえ}つだねずみと角力とりして、太^{こえ}つだねずみに、やせたねずみが、こてんぱんにへさんざん〜やらつていた。

「はあ、かわいそうなもんだ。どこのねずみだべ」

と思つていたら、人の気配したもんだから、ねずみは逃げて行つた。逃げて行くとこ見つだれば、太つたねずみが長者さまのねずみで、やせつたねずみが自

分どこのねずみだったて。

「はあ、こりや、おらえの家にはうまいも何もないから、落ちこぼれもないもんで、太えらんねくて、角力まで負けていんだ。よし」

というわけで、家さ来て、

「ばんちゃ、ばんちゃ、こういうわけだ」

「んでは、じんつあ、ねずみさ餅掲いて食せだらええがんべな」

「はいつは、ええごんだ」

て、餅掲いて、裏板さあげつだ。

ところが、ねずみはほの餅食つて、次の日また角力とりに行つた。ところが餅食つたれば、ほれ、力出て、対等の勝負した。ほの肥えつだねずみは、こんどは汗ふつつつかいで、何とも仕様なくなつて、

「なして、お前、ほだえ強くなつた」

て言うたれば、

「実は、おらえのどこのじんつあん、ばんちゃんが親切で、おれさ餅御馳走して呉

だんだ」

「餅ていうな、ほだえ力になるもんだか」

「ほだ」

「んだらば、おれも御馳走なっだいから……」

ていうわけで、ほの肥^こえっだねずみが、次の日から、長者さまの小判背負つて餅御馳走なりに来た。ほして餅御馳走なつて行つて、広場で角力とりすつど、両方で餅食つてがらはあ、仲々勝負つかね。まずほとんど引分けの勝負ばかりだ。

ほして、毎日餅続けた。ほうすつど毎日小判背負つてきた。いつの間にか、じんつあとばんちやがすばらしく金持ちになつてはあ、ねずみのおかげで金持ちになつたど。んだから、正直に、親切にすつど、いつかむくいらつで、金持ちになるもんだて言うたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

6 旦那と小作

491

むかしむかし、この宿に少し頭もええんだげんども、つうと（少し）旦那衆なもんだから、少し大らかな人いだったて。

ほの人が、ある人と山さ干草刈りに行った。ところが、一生けんめい刈って、草重いもんだから、干して軽くして背負うために、刈って干しておいて、そいつ束ねて後で背負ってくるわけだ。干草刈りていうな、昔やって……。

ところが昼飯たべて、昼休びして、昼眠したれば、相手が眠ったと思って、人のええ人が、胴巻きから、くるくるくるとほごして、何すんべと思って、眠ったふりして見ただれば、錢勘定したって。ちやがらん、ちやがらんて、何んぼ勘定すっと思つたれば、三十両勘定したって。

「ははあ、錢三十両勘定した。よしよし」

て、ほの一緒に行った人あ、夕方になつてから何くわぬ顔して、

「先生、先生、今夜、おれ、女郎衆おごるやえ」

ていうたって。

「ほう、お前、女郎衆おごるなて、めずらしい。他人さばりおごらせてばりいたお前が、おごるなんて、んでは、お前にだら、おごらつてみたい」

「先生、ほのかわり条件がある」

「条件つあ、何だ」

「まず、のぼりくんだり人力車で引っぱってもらわねっだなね、おれあおごるんだから」

「いや、ほだな、いと易いごんだ。んでは人力車貸つて来っぞ」

「というわけで、人力屋さ来て、

「ほれほれ、人力車賃して呉ろ、なんぼだ」

「三十銭もらわねっだなね」

「なんだ三十銭つあ、はなしあんまいな。登り下り引っぱって十五銭。三十銭つあはなしあんまいな」

「いやいや、素人さ貸すと、とてもじゃないげんども、どここなく走ってある

くもんだから、車損じて何とも仕様ない。三十銭で不服だら、おれ十五銭で引っぱんだから、のらはれ」

と、こうなつたわけだど。したれば、

「いや、まず、ここさ三十銭置いたよ」

て、借りできたつて。カラカラで、引っぱつてきて、

「んだら、のらはれ」

ていうわけで、ほの人のええ旦那衆は車夫だずも。ほれ。股引はいて、尻はしよつてよ。

こんどは今迄、小作人のよくよくふんじやつたみたいな人は、旦那だずも。羽織・袴で、白い羽織のヒモつけて、ほして人力さふんぞりかえつたずも。ほして人と行きあうたんび、威張るわけだずも。

「うっふん、うっふん」

て、威張る。んだど、

「あらあ、先生あ引張つて、小太（小作人）は、ありや旦那になつて、のつて歩

く。いやいや、世の中変ったもんだ」

て。んだど、ほりや人と行き会うたんび、

「うっふん、うっふん」

て。

「うん、小太、うっふん、うっふんて、あんまり言うな」

なて、引張って行つたなて。

ほして、上山の町まで行つたれば、小太は、

「お客さんどう」

て、ダミ声出したずま、ほれ。ほしたれば女郎衆だ、皆集まつてきた。ほして

先生の買いつけした、なじみの女郎衆は、

「あら、あなた、檣下での資産家だなて、おれさ嘘ついったげんど、いつから

車夫になつた」

ていうわけだずも、ほれ。

「小太なて、おら家の小作人^えだの、おら家の奉公人だなていだっけあ、小太が旦

「那だどれ」

「ていうんだど。」

「いやいや、ときによつては、ときによつては……」

「て、いだつたなて。ほして、小太は、」

「今夜は、女郎総上げだ。ただけ全部上げろ、ほして帳場から筆と墨もつて来い」

「ほして、筆と墨もつてきて、へ二両へ書いて、額^{ひたい}さ、そいつ貼^貼つて呉^けだど。」

「ほうして上山始まつてから無いドンチャン騒ぎしたど。ほしたけあ、次の日なつたつけあ、ほの小太は頭おさえて、」

「いやいや、頭痛い。何だてこりや頭痛い、まず」

「頭痛いなて、何した」

「先生、銭貸してける、まず」

「銭なて、おれあ持たね」

「持たねなて、あんまいな、昼間勘定しつたけどら、チャガラン、チャガランて」

「この野郎、見てきづがった」

ていうわけで、三十両払ったど。一晚で三十両だずもね。昔の金で。

「こうなれば、五分と五分だ。帰りはお前引っぱれ」

人力、小太、引っぱらんなねぐなつたずも、ほれ。ほしたら、

「先生、先生。おれ引っぱるはええげんども、おれ引っぱたら、割カンたな、ねえ」

ていうたど。

「うん、十五両。ほんでは駄目だ。おれ引張る」

ていうて、ほしてまた、ほうほうて引っぱってきたど。ほして来る時もまた威張るわけだずも。小太は、

「うっふん、うふん」

「うん、あんまり威張るな」

て、引っぱってきて、ほして銭三十両、神棚さ上げだった、ほら、どっちゃ置いっだったなて、とうとう、はいっ取らずじまい、ただ、のぼりくだり人力車で

引っぱって、女郎衆おごって、きまり（終り）だったなという話だったど。

7 先生の手紙

ほの人あ、なかなか大らかな人だったもんだから、やっぱり女にももてたらし
いんだな。ほして上山さお妾さんかこつていたもんだど。

ほしたれば、ほのお妾さんから手紙来たわけだど。

「あなた、五十兩呉^けでけるて、この前言うたんだげんど、その五十兩、いつ持っ
てきてけんのだ。首長くして待つてだ」

ていう。切々たる恋文きたど。はいつ、先生いたどこさ来つどええがつたげん
ども、奥さんと息子いたどこさ来たずも。

ところが、はいつ、女文字だていうわけで、奥さんが開いてみたんだど。ほう
したれば、やれ五十兩持つてきてけるなていう、切々たる恋文なもんだから、ご

しやえで、ぶりぶりしていたずも、ほれ。

「なんだ、家の中つめて、ぷりぷりていうて、五十両呉るの、百両呉るのって、もつての他だ」

て、息子と語ったど。ほさ「うつふん」なて、表から帰つて来たずも、ほれ。ほしたけあ、

「ううん、この野郎だ、見たな」

なて、来るより早く。

「旦那のすること氣に合わねな、皆出て行け。おれはこの家の主だ。おれのこと氣に合わねな出て行け」

なて。ほしたら奥さんと長男は出はつて行かんねがつたずも、ほれ。して、黙つてしまつたつて。

先に、豆泥棒だの、芋泥棒だの、稲泥棒だの、やつぱり居つかつたつて。はいつさ、豆番、芋番て、番つかんなね。

その先生は若衆頭だったずも、ほれ。ほしたけあ、小太さんという人きて、

「先生、今夜、豆刈りのクジだい」

こうなつたど。若衆が集まつて、豆刈つてきて、青バタ豆ば、ゆで豆にして食うなだつたど。

て、へクジ引いてけらっしゃい、先生で、持ってきたど。小太は持ってきたわけだ。

「この野郎、にさのクジは駄目だ、なんぼ引いても、おれしか当らねから、八百長だ。おれ、クジ拵こしやうから、にさ引け」

と、こうなつたわけだど。ほしたけあ、引いたけあ、ほの小太はんが当つたずも、ほれ。ほしたれば、ヤサモサと一背負つて来たわけだ。

「いやいや、小太、お前の豆刈りは上手だ。この豆のうまいこと、こりこり実入つて、すばらしい豆なもんだ。豆刈りは小太に限る」

なていうたわけだ。

「いや、御馳走、御馳走」

なて、豆食ったわけだど。

したれば次の日、親父え呼び出さったずも、ほの先生は……。

「こりやこりや、何だ、お前。若衆頭だ、芋番だ、豆番の親方だのつて、どこさ昨夜ゆんべなついった。狐壇の家の豆、つるつと刈らった」

ていうたつて。

「ん、あの野郎、ほに、小太野郎だ、おえね野郎（わるい野郎）だ、ほに。おら家の豆刈つて来たずあ」

ていうわけで、

「小太、小太、にさ、おら家の豆刈つてきたった。んねが」

「先生、泥棒だも、どこここていらんねったな」

「ん、それもそうだ。豆のクジいらねはあ、おればり刈るはあ」
ていうたつて。

こいつは櫓下の逸話だ。

むかし、奥さんが病氣して、あらゆる医者さかけても、医者も典者もかなわねくて、ほして困っていた。ほして占い師さ行つたれば、

「旦那さん、お前の一番好きなもの、断ちものすつど治つかしんね」
て、こ言わつた。

「うん、おれが一番好きなものは餅だ。かかの為だら仕方ない。断ちものすんなべ」

ていうわけで、お神明さまさ、餅の断ちものを誓つたつて。おれは餅、一生食わねて……。

「んだから、かかの病氣だけは治してもらいたい」

ていうた。ほうしたれば、薄紙はぐように、ええぐなつた。ほうしてたちまちええぐなつて、ほれ、喜んでいたげんども、大好きな餅食んねには、ほとほと困つてしまつたていうんだな。ほの旦那さん、ほして考えだんだど。

「いや、ほだほだ、神様さ、おれあ餅一升食わねて誓った。んで九合九勺は食つても、くなねべ（かまわんだろう）」

どて、ほの次の日から九合九勺だけは食うことにしたつて。

こんどは、別の人が、また餅断ちが一番ええて話聞いたもんだから、餅断ちして、やっぱり、かかの病氣治したわけだど。

やっぱり、治つてみたれば、ほの、治らねうちは、ほれ、藁をもつかむ思いで、病氣治しに専念してるんだげんども、治つてみたれば何とも手持不沙汰ていうか、餅食だくて餅食だくて仕様なくて、神さまさ行つて、

「なぜしたらええかなあ」

て、考えていだつて。

「どうせ、こうせ、思い切つて餅食うべはあ」

ていうわけで、食つてたな、他の人見つたわけだ。

「何だ、君、餅断ちしたなて、餅食った、どら」

「いや、おれはこの餅断ったんでなくて、モグラモチ断ったんだ」
て。

餅断ち二題。

9 ぶいろめの由来

この檜下の宿に、〈ぶいろめ〉という地名ある。

〈ぶいろ〉ていうのは〈かげろう〉の一種だ。

むかし、旧藩時代に、どこの地にも、不良兎というところあった。不良兎ていうのは、しょっちゅう増水して、水増しして流されるところとか、あるいは山沢の冷水かかり、米が六俵穫れつどこ、三俵しか採れねどこかという、そういうどこを言うたもんだ。殿さまもそういうどこは〈出しぞく〳〵年貢〉も少ながつたど。

ところが、そいつが困ったことに廃藩置県になって、いろいろ売らんねことになったりした。ところがどこさ行っても「不良免」ていうと半分の値もしねどこだ。んだもんだから、榎下では、頭のええ人いで、不良免と〈ぶいろめ〉の目、取り換えだんだど。

〈ぶいろめ〉だていうていで、いざ登記になつど、「不良免」だど、これ。て、〈ぶいろの目〉のつもりで買ってみたれば、不良免だ。

「不良免でなくて、あそこ〈ぶいろめ〉なはずだ」

て。早い話、うまく誤魔化さつだもんだど。今でもそこ「不良免」ていう人誰もいねくて、〈ぶいろめの田〉ていうて、地名になつてゐる。

それは、榎下が殿さま、送り迎えする時代には、非常に荷背負いだ、何だて、いわゆる仕事があつて栄えだげんども、廃藩置県になつて、街道からとれる金がなく困つた時代あつて、田地田畑、六・七割、他所の人に買わつてしまった時代があつたんだつて。ほんどき売るために、不良免ば、〈ぶいろめ〉にしてしまつたんだつて。

10 シャクシ小屋の由来

495

むかしむかし、この辺で、《シャクシ小屋》ていうどこある。これは《細工師小屋》から訛ったものだつたていうんだな。

何を細工したかていうと、土器石器、矢鏃とか皮剥ぎのようなものを、腕のいい人が、みな細工する小屋に集まって、しておったから、そこ《細工師小屋》ていうたのが、今、《シャクシ小屋》ていうんだと。

11 虎の皮

496

むかしとんとんあつたずま。

ある部落に、稼がねで何とか銭入る方法ないべかなあて考えつた人いだつたど。むかしの百姓はきついもんだから、何とか、こりや。江戸あたりさ行つてみつど、

みな曲って稼いでいっかていうど、ほでもない。相当楽なような格好して暮している人もいるし、なぜか楽して暮す方法ないべかなと思つて、つねがね思つてい
だつたて。

ところが、友だちが来て、

「今まで稼いんだ人が急に病氣したもんだから、その人の代りに、代役、何とか探しにきた」

「楽だか」

て聞いたら、

「いや、楽この上なしだ。寝たり起きたり、あくびしたりぐらいしていっど、ええんだ」

「ほんでは、なんぼ呉るんだ」

「百文だ」

「いや、百文では大したもんだ」

わらじ二足で三文しかならね時代だから、はいつが百文だ。こいつは大したも

んだ。

「んだらば行くげんど、何^なんた仕事だ」

「いや、寝たり起きたりしてっどええのだ」

「ほだえ、ええ仕事あつか」

「いや、あるんだ。歩^んじやてみる」

というわけで、その人が頼まっで行ったれば、江戸の見世物小屋のライオンの皮着て、ライオンになんただけど。ほして立ったり寝ころんだりして、お客さまずうつと見て通るうち、寝たり起きたり、あくびしたりぐらいしてっど、ええわけだど。ほして一日、二日過^{ひして}ぎだど。

楽で百文ずつもらってええもんだと思っていれば、〈東西、東西〉ていうわけ、始まったんだど。

「このライオンの檻さ、虎入れてやる」

ほうして、ほれ、虎の檻、みなしてかついできて、ライオンの檻の傍さ、ふっつけたど。

「いや、なんだ、おれば虎の食いものにするため、楽するなの、何だのて言うた。

友だちだなんていうたて、アテにさんねもんだ。おれば虎の餌食にするため、わざわざ田舎から引張ってきたんだ。いや、おれも第一巻の終りだ」

と思つて、ふるえていだんだど。いよいよもつて檻の蓋あいだんだど。へうわぁん」というけあ、虎入ってきた。ほうして小っちやこくなつて、すぐだまつていたれば、

「おい、おい、心配すんな、おれだ」

ていうたつて。ほいつあほの募集にきた人だつたつて。ほして二人あ、じゃれで、その場終つて百文ずつもらつたて。どんぴんからりん、すっからりん。

12 長生きの盃

497

九十才になって、なおカクシヤクとしていたもんだから、九十才になって、お伊勢詣りすんべというわけで、郎党を引きつれて、お伊勢詣りに行って、どこの旅籠さ行って、どこさ泊っても、

「おれは九十才だ」

というど、みな平身低頭して、まず、

「九十才になってお伊勢詣りなて、おめでたいごんだ、えらいごんだ」
て、礼賛すつかったて。

ところが、ある村さ行ったれば、

「九十才なて、とんでもない。おら方に百三十才になった者いた」
ていうことになったんだど。

「ほんでは、是非お盃頂戴すんなね」

というわけで、ほしてその家さ訪ねて行ったったて。ほしたれば居ねつけ

て。

「どこさ、ござった」

ていうたれば、

「山さ行つた」

「はあ、百三十才もなつて山さ行くようでは、まず大した体力の人なもんだ」

と思つていだつたて。ほしたれば、若衆つきそわれて、とぼりとぼりて、杖たよりに来た老人がおつたど

「あなたさまでございますか」

て聞いだれば、「うん、おれだ」てだど。ほして、「何しにござつた」て聞がつたわけだど。

「いや、こういうわけで、長生きのお盃頂戴にあがつた」

て。ほう言うたれば、

「ほうか。希望だら、盃あげねわけでもないげんども、長生きぐらいひどいものはないもんだ」

て言うたつて。

「まず、おれはこうして毎日山さ行つてんのは、山ばりだ、変らねな。丸い田んぼが四角になったり、三角な畑あ丸くなったり、道のないどこさ道切つてみだり、もう生まつた時代とは、ほとんどちがつてきている。それから息子に先立たれ、孫に先立たれ、逆目会^{さかめ}つていんなね。とにかく、長生きは、ゆめゆめ好むものではない」

百三十才になる人に九十才になる人が意見さつだつて。

俚 謡

はでな 赤山

開けた 檜下

自慢 皆沢

やぼ 関根

(旧本庄村の地名を入れたもの)

櫓 下 雑 記 — 冠婚葬祭その他 —

○宿場町櫓下の婚礼は小笠原流でやるのが普通で、そのとりしきりは庄屋さんが行なつてくれたものであつた。若衆組は警備の仕事をするのがしきたりであつた。三々九度のいわゆる御祝儀は短時間のうちに終了するものであつて二時間ぐらいであつた。

○仲人は七足半のわらじを履かなねと言つたもので、器量をまず重要視した。婚約すると、仲人が「口割酒」を一升買い、嫁の家に五合もつて行く。これは「ますます半合（繁盛）」の意味があるという。この酒を分けるときは、藁のミゴを使って、それで測つて半分にした。仲人がヨメの家に行き、結納金をサンボウにのせ、末広とスルメをそえて差出すと、ヨメ方では「受取」を書く。またその受取りに「寿」とか「千鶴万亀」などと書く。仲人は口上として、「本日はお日柄もよく御両家の御結納まことにおめでとうございます」と言つと、ヨメ方では「御結納の品々、かたじけなく御受納いたします」という。その後小

宴をもよおす。

○結納の折に「親類面付」の交換をする。結納は目録で行なうが「モクロク」を「茂久呂久」と書いたものである。

○御祝儀の当日はヨメ方から道具を運ぶが、それを「カタイレ」といい、才領を先頭にクモスケが道具を運ぶが、才領は羽織・袴で来る。才領は祝儀をつつまねばならなかったから、「あんまりカタイレをすると、才領は貧乏になる」といったそうである。

○荷物をムコ方にもって行くと、入り口で謡で受けとることになっており、クモスケは台所で酒を御馳走になり、才領の方は本膳に出る。

○通婚圏はひろく、上山あたりまでであるが大抵は村内であった。ただし、隣部落とはしないというのは「山論」の対立からであつたらしい。

○ヨメは歩いてくるときにはトメソデの着物でやってきて、中宿をきめておきそこで衣装を着かえる。中宿は檣下の婚家の上にはとらない。中宿は大抵親戚にたのむ。行列が途中で他のムカサリに会ったらチリガミを交換し合うが、これ

は「負け勝ち」がつくといけないからだという。ただし、葬列に合うことを嫌うので、事前に聞く。

○中宿から婚家まではオマチ女郎が手をひかえて行く。婚家に着くと、裏口から入り、控の間に行く。

○ヨメが実家を出る前に「見参祝儀」をするが、ごく近親者のみを呼び、嫁だけで、ムコはそれに参加しない。

○三々九度の前に「ケツシヤク」といって、雄蝶・雌蝶から酒をついでもらう式があり、この時に仲人は「ムコ、ムコ」とムコヨビをした。

○三々九度が終ると、ヨメは仏壇にお詣りするが、上山では三々九度の前に仏壇にお詣りをするものだという。

○祝儀のときに仲人が「高砂」を出す、後半分は謡い師がうたう。

○祝儀のとき、窓は破られるほどよいという。若衆（消防）はもっぱら警護役で、披露のときに若衆は招ばれる。警護役は弓張りちようちんで見張りをしたものだ。

○式が終ると「床入り」で、消防団長（若衆組の組頭）が立ち合つてやるが、次の朝には母が手拭一本程度の土産をもつて、近所廻りをする。

○三ツ目には、里帰りで、実家に行くが、その日は泊らずに一緒に帰ってくることになつてゐた。

○婚約がきまつたら、日をえらんで「コノケオトシ」をし、「オハグロ」をつける。オハグロは菜種油とスス（ヘソビという）をまぜて作り、それを落すときには酢を使った。

○仲人には正月、節供、盆には土産をもつて挨拶するが、大抵二、三年ぐらいだった。また仲人が逝くなつたときには、香典と花を供えるしきたりだった。

○仲よくなつたが、嫁方では、「あんな貧乏な家に娘は呉らんね」といつて、仕方なく、男は女をつれて高湯温泉につれて行き、途中、ドウス平で眉毛を剃つてくれ、オハグロをつけてやったので、その後半年ぐらい父は出入りをこつたが、母はこつそり娘に会つていたことなどもあり、仕方なしに父も折れたといふことがあつた。

○妊婦が五か月のイヌの日にヨメの実家で岩田オビを買って祝いにくる。初産は実家にもどってお産をしたものである。

○メンスのときには朝の火のたきつけはさせない。メンスの周期はヨメにきたらすぐ姑に言わねばならなかった。

○うまいもの食って何もしないと難産するから働いた方がよい。城中などでは妊婦は高下駄をはいて豆ひろいをして体をととのえさせたという。

○子が生れてから七日目を「シチャ」と呼び、サシミ、コイ料理で、子産させババを招待し、名をつけるが、大抵は当主が命名した。子産させババは経験のゆたかな人であった。

○子を産してから半年ぐらいはカツ味噌と野菜をオカズとしたが、乳の出がわるいときは鯉を一匹食わせることがあった。

○風呂に、温ったまるように大根葉を干したものを入れたり、クズの葉を干して入れたりした他、焚物に大根葉を干したものを使ったりした。

○子どもの名前には「捨」という字は大変よい。これは一度捨ててから拾うとい

うところから来ているという。何画の字がよいと占ってもらうことあり。

○ 婚家には出産後二十一日目に帰るが、このときには亭主が迎えにくる。

○ 女百十日、男百二十日目を「クイソメ」とて、カユを食わせ、膳に三種の料理を並べた。

○ 六月歯（ムツキバ）は親食い歯といい、タライに入れて橋の下をくぐして流し拾い上げる。

○ 後産も流産も同じように墓に埋める。

○ 妊産婦が死んだときには、別々の骨壺におさめて埋める。間引きの子を水子と
いった。

○ 「虎猫の恩返し」の昔話は旧村皆沢にある竜谷寺（真宗）の和尚の説教として語ったということがある。

○ 檣下には「親不幸物語」という本がのこされていて、義民文太の話がのついているという。

○子どもの遊びにネッキ打ちがあり、太いものになるとスリコギ棒ぐらいのものもあり、神社の前で遊んだものという。

○先祖の与左衛門（祖父権六の父にあたる）は細谷の人で、細谷の寺を建てた人でもあり、その細谷に、大蛇を殺したら白い汁が流れ出し、その汁の流れたところにキノコが出たという話をきいたことがある。

○檜下での一丁前は、山仕事で木は二日で二間、柴は二十五把、下刈りは三畝から五畝。田仕事では、田うない、田植共に一日一反歩。桑こきは五〇貫匁、草刈りは朝草六束、一日で九束。カツツキ刈りには「カツツキ、カタビラ、田植ヌノコ」という言葉がある。また「作がわるいと炭が安い」といった。

○釈迦岳という相撲は山形市東沢の釈迦堂の生れで、九才のときに碁盤を手にもって、それをふりローソクの火を消すほどの怪力だったという。

○山の神は寺の裏に万年堂として祀り、一月十五日のイワイワ（サイトヤテ）のときの木だけはどこの山から伐ってもよかった。

○ 檣下は昔、川の東の方（向い町といっている）にあつたが、宝暦六年に悪疫が流行したため、現在の川西に移った。その折に悪疫を絶つために観音さまを受け申して、福聚寺に祀った。

○ 「狸」は職人は「タ」を抜くということで珍重したが、百姓は忌嫌った。

○ ヤンメ地蔵があり、目がわるいときには、杉ヤニを地蔵さまの目につけると治るといった。

佐藤家の昔話 十一集について

佐藤家の昔話も、これで十一号に達し、講談社から『東北に残った大阪の昔』として、佐藤家に伝承された昔話のうち、宿場町檜下のおもかげのこい昔話百十三話をえらんで出版していただいた。その後ここに収録したものを集めると、佐藤家の昔話は何と四九七話に達したことになる。その特色については『東北に残った大阪の昔』の〈まえがき〉に記した通りであるので、改めて記さないが、山形新聞で県立博物館の大友義助氏が好意ある御批評を下さったので、再録させていただくことにした。

〈武田先生が今度講談社から「東北に残った大阪の昔」という昔話の本を出された。武田先生は「山形の民話」を主宰し、置賜地方をくまなく歩き回って、優れた昔話の話をさがし出し、「牛方と山姥」「工藤六兵衛翁昔話集」「羽前の昔話」などを次々と著出している研究家であり、この業績により昭和五十年度山新三P

賞を受賞された方である。

この度の本はこれの中でも特色あるもので、上山市榎下の佐藤孝一さんから採話した昔話一一三話を収めている。武田先生はすでに佐藤さんから四八五の話を聞いていたとのことである。これほど多くの昔話を語れる人は日本にはもういない。佐藤さんは日本一の語り手である。このうちの面白いものだけを選んで編んだのが本書である。

佐藤家の伝えでは先祖は大阪の出であるが、仲間との昔話の語り競べに敗れ、元禄五年に上山に下ったという。武田先生は同家はお伽衆の系譜ではなかうかと考えておられる。また榎下は羽州街道の宿場町であったために、諸国の旅人の往来が繁しく、これが佐藤家に伝わる昔話の数を驚異的に多くしたのではないかとしている。事実本書に収められた昔話の中には、大阪やその他の国々に関する話が数多くあり、「東北に残った大阪の昔」の書名もなるほどとうなずかれる。

理屈はともかく、その中にはツバメやカスベの名前の由来話、おんぶおぼけの話、ほらふき大会の話、鼻が高くなる天狗の扇を拾って失敗する男の話等、いず

れもそれぞれに面白い話ばかりである。ここには宿場町檜下の人々のよろこびや悲しみ、願いや祈りが、ありのままの姿で語られている。

佐藤さんの昔話は間もなく五百話に達するが、それを楽しみにしながらも、大変な御努力で思い出して下さって、語られることに、深い敬意と謝意を表する次第である。

民話と発達観について

一、民話の「語り」

過疎部落の一つ、山形県の西の山合い、飯豊町大平、新沼という部落に、民話をさがしたことがある。藩制時代には山に入つて樫や栗の木を伐り、曲げものを作つていた部落であつた。曲げものを作るのは一家総出の冬の仕事であつた。丈余の雪に埋まるこの部落の人々が生きるための必死の仕事でもあつた。⁽¹⁾

まず、秋の刈入れを早々に終わし、後始末を女たちに頼んで、男衆は山に入る。素性のいい樫や栗材をさがしては伐り倒すと、それを二尺五寸の長さに切る。これを玉切りといっている。それをさらに板目に割つてから、背負つて家に帰り、山の水を引いた家の前の種池たんなげに浸しておく。

いよいよ雪がくると、池から引き上げた板を、割り山刀なたで一分五厘から二分の

厚さに、年輪にそってそ割る。それを削り山刀という刃物で薄い板にし、仕上げのカンナをかける。ここまでは主に男の仕事である。その先、板を大鍋に煮る。囲炉裏には、外を吹きまくる吹雪も知らぬほど火が赤々と燃やされ、やわらかくなるまで煮られた板を、鍋から引き上げて、手加減で丸く曲げて輪を作って行く。板の端と端を重ね合わせると、鉋をかけて火棚にぶら下げる。三日もすればがんがんに固く干上がるので、板の合せ目を桜皮で縫い、杉板を切って底と柄をつける仕事は女子の仕事であった。技術を伴わない生活というものはないが、それを体で憶えるまでは数年を要する。だから子どもの遊びに屑木で曲げものをつくるものがあつた。板を腹でおさえて、削り山刀で手前に向けて板を削るが、削りそこねて、腹を切ったこともあつたと、腹を見せてくれた。

一家を上げての曲げつくりには、老婆の語る民話は、仕事の一つであることを聞いて感動した。囲炉裏には火が真赤に燃え、湯が大鍋にふつふつと煮えている。囲炉裏端は曲げものづくりの仕事場でもあつたから、山刀やカンナ、小刀、削り剪、キリなどの刃物が散乱している。年のゆかぬ幼児が囲炉裏のまわりに出てき

て騒ぐのは困るので、囲炉裏の反対側にある台所の隅に、掘り炬燵が作られていて、そこが曲げづくりに手伝いのできない幼児に老婆が民話を語って聞かせる場所だったという。

老婆の語る民話が面白くなければ、孫たちは騒ぎ出すから、老婆はいろいろに趣好をこらして語ったものだったという。ある老婆は、「語りが下手だから、子どもが騒いで、危なくて仕様ない。もっとしつかり語れ」と、怒られたものだとも、茶飲みで老婆が集まると、お互いに民話のタネを交換し合ったとも、当時を思い出して語ってくれた。

なるほど、その部落での採集は二日で五十話にも達し、「牛方と山焼」「狐女房」などは、ほれぼれするほどのすばらしい語りであった。目を閉じて聞くと、次々に情景が浮かび上がってくるような語り口であり、数篇の笑話を除けば、本格的な民話だけであり、民話がここに生きているということを実感として感じとることができたものである。

民話が「語り」であるのを知ったのは、二百話の語り手であった山形県南部の

白鷹町に海老名ちやう姫、工藤六兵衛翁をたずねてのことであつた。^②工藤六兵衛翁は、絵本の「さるかに」の説明をすると、じいっと耳をすまして聞き終るや、

「うん、牛の糞（びたくそ）が登場しないんだらば、この話は終らねえのよ」

といいながら、「さるかに」を語ってくれたのだった。工藤翁の「さるかに」には、蟹のすけだちにやってくるのは、栗、蜂、臼だけでなく、他にも小蟹、針、牛の糞があり、栗の代りに栃の実だったという。しかも、牛の糞は「びたら、かたら」とやって来なければいけないのだといつてゆずらなかった。猿が戸の口から外へ逃げようとしたときに、たまたまそこに牛の糞があつて、それに上がつて滑つて猿がころんだところに、臼が屋根から転がつてくるというのではなく、牛の糞もちやんとすけだちに來たのだというのだった。

絵本では消えてしまった「語り」とは、実のところ、そういった細かい配慮の中にあるものであつて、祖母が孫に語り聞かせることを本来の民話の姿であると感じれば、孫の、その時の健康状況やら態度などから、孫の現在の実態を鋭く把握し、民話の語りへの欲求、関心の度合いなどを理解すると同時に、祖母として孫

に期待するものを「語り」の中に昇華させようと努力したにちがいない。

民話の魅力は何といっても、語り手の祖母と、聞き手の孫との間に、血の通った世界を創造するところにあるといつてよい。語り手と聞き手が共同で創造する世界であるともいえる。そしてそれはまた、生活の古典でもあったといえる。

民話の語りには、ある約束がある。まず語り始めに必ず、「むかしあったけど」とか「むかしむかし、あるところに」とか「とんと昔あったけど」といった始まりの句がある。それは「昔」という永遠の時間の中のできごとであつて、しかも場所はどこでもよい。遠い昔のどこでもよいという設定は、特定の時代や場所限定されない話である。それはフィクションであることを端的に示す言葉であり、子どもの文学であることをも示しているといえる。

また、民話を語り終えるときにも、特定の句でしめくくる。二、三例を拾えば次のようなものである。

へとーびんさんすけ、猿まなぐ、猿のまなぐに毛がはえて、けんけん毛抜きで抜いたれば、まんまん真赤な血ができて、めんめんめつこになりました」

〈むかしとーびん、さんすけささまき、巻いだけど、ごんすけきて食ったけどはあ〉（共に山形）

〈これで市やぽーんとさけた〉（新潟）

〈いんちこまんまんさかえた〉（岩手）

〈いまがいままでよか暮しをしているの〉（鹿児島）

などがあり、この軽妙な結びの句は、「今日はこれで終っても、また明日には別の民話を語ってくれる」という期待感を聞き手に抱かせているものといえる。

だが、民話の語りの中で、特に重視したいと思うことは、語りの一節々々に、必ずあいづちを打たねばならなかったことである。あいづちの言葉は地域によって「オットー」「ハート」「ハイ」「オン」とか、新潟県関川町では「サンスケ」という美しいあいづちも聞かれる。古くは「口に烏帽子ハア」といった言葉も、古くは岩手県にあったというし、山形の江口文四郎氏によれば、一節ごとに、「ああ、面白いごと、面白いごと」と打たねばならなかったことが発見されている。そして語り手は、しばしば「オットー」と言わないと、語らぬぞ」といったり、「オットー

と言わないなら、眠ってしまったものとして、語りをやめる」などといって、あいつちを強制することさえあったのを見れば、民話は単なる話ではなく、語り手と聞き手が「語り合いながら創造して行くもの」であり、民話の世界は、共同で創造した世界であつたことも明瞭な事実である。⁽³⁾

また、民話は生活の古典でもあるといった。「蛇簪入」のモチーフはすでに、『古事記』の三輪山伝説の中にも見られ、「黄金の斧」のモチーフは同じ『古事記』の「海彦山彦」の中に見られる。「三年寝太郎」「浦島太郎」「一寸法師」「鉢かつぎ」などは、『御伽草子』の中にすでに文字化されていることでも理解できるように、当時すでに一般に流布した語りであると共に、現在も口から耳に語り伝えられて生きているのである。そしてそれらの話は、「だから人真似するものでない」とか「だから、他人には親切にしなければならぬ」「正直だから宝ものが授かったのだ」という教訓のオチを持つものも見られなくもないが、そういう教訓なしにも十分、民話のもっている意図が、文学的感動を通して無理なく聞き手に伝わって行くように配慮されている。配慮されているというのが大げさであるとすれば、幾代も

幾代も語り継がれて来た中で、老婆の手のぬくもりの中で練られ磨かれて、珠玉を温めるようにして文学に成長したものといつてよいかもしれない。それを聞く子どもは、教訓として受けとるよりは、文学的感動を通して、自分たちの生活倫理を自らの中に育ててきたものではなからうか。だから子どもは感動した民話を何度もくりかえして聞きたいと願ったものなのであろうし、このくりかえし、同じ民話を要求する聞き手の心情を、民話の文学性と見ることは決して不可能でない。

ただ、私は民話の「語り」が今日聞かれるような形に社会的に定着をしたのは、江戸封建時代ではなかったろうかと推定しているが、そのために空想的要素はグリム童話などに比較してとぼしく、天狗とか鬼とか天邪鬼や山姥などを創造した民族でありながら、話そのものは案外にリアリスティックに構成され語られているように思われてならない。そういった立場から見ると、「地藏浄土」や「ねずみ浄土」「猿地藏」などにある文芸性は注目に価するものであろう。ねずみ孔から入りこんだ爺が地藏に助けられて、鬼が博奕をしていたのを鶏の真似をして追い

払って、置いて行った金をもらってくる話であり、転んで行った団子を追って、ねずみの世界に入る話、昼眠していた爺を猿がかついで川を渡って別の世界に行く爺の話は、日本の民話の中では数少ない中で大変貴重な空想性に富んだ、メルヘンを思わせる民話なのではなからうか。

日本の民話のもつリアリティの課題は、なお多くの問題を残しているものであろうが、それが逆に若衆に語りつがれた笑話や世間話の分野に踏み込むと、農民が支配階級の搾取の中で貧困にうちひしがれながら、熱烈に追い求めた、生活の理想が急に生きいきと息づいてくる。

どちらかといえば、農民は口下手であつた。山に閉ざされ、「もぐらと百姓は土を見て暮せばよい」という社会の圧制がそうしたのであるか。外へ向う心が封じられたから、内にこもった生き方をしてきたのだろうか。しかしそういった生活であつたから逆に、農民は自己に忠実に、部落共同体に誠実に生きなければならぬと努力して来たのであろう。民話に農民の求めた、限らないゆたかさ、そして逆に権力への憎しみ、そういったものをせめて子に伝えねばならぬと決意した

心情が美しい民話に多く残されることになったのではなからうか。「笠地蔵」「食わず女房」「貧乏神」などに見られる生活のきびしさの反面、「馬鹿簀」「和尚と小僧」から『木小屋話』と呼ぶ一連の若衆の語りの中に、若い人々のエネルギーを、今日われわれは見ることができる。語りの中でいつも明日を思い描き続けた美しい未来と、「語り」の怨念といったものを民話の中に見なければならぬのではなからうか。

二、集団の中の子ども

子どもは遊びの中で成長する。遊びのない生活からは、自分たち自身の生活を支える倫理は育たない。しなやかな感受性をもって、子どもは大人を模倣し、子どもの集団を作り、その中で成長して行く。

子どもの精神的発達を考えると、母の背中で聞いた子守唄から始まるといえる。

やがて民話の世界がそれに続く。民話の世界というものは、子どもの中に眠っている夢幻の世界を掘り起こしてくれるが、掘り起こしの手がかりになるのは、「語り」であり、「語り」の基本は子どもの生活のリズムに合致することである。民話に限っていえば、「動物民話」が一、二才の頃から語られはじめる。その「動物民話」にも年令に相応した話の系列が配慮されている。⁽⁴⁾

弟が山芋を掘ってきて、兄が盲だったから兄にうまいところを食わせているにもかかわらず、弟の方がうまいところだけ食って、自分にはまずいところだけ食べさせているにちがいないと、弟の腹をさいてみると、弟は芋の尻尾しか食べていなかったことを知って、神さまから鳥にされて、一日八千八声鳴かないと食べものにありつけなくなったオタタカ鳥の話。

蛙と猿が餅盗みをし、ずるい猿が臼を山から転がして、早く臼にたどりついた者が餅を食う約束をしたが、転げる臼の中から餅が落ちてしまい、猿の後をのたりのたりついていった蛙の方が餅にありついてしまう。猿は餅欲しさに分けてくれるように蛙に頼むと、餅を頬と尻にぶつつけられるという「猿の尻はなぜ赤い」

の話。

このような民話は、「由来ばなし」といわれるが、最も初期の「語りきかせ」として与えられるものである。

次いで、動物が劇的構成をもって語られる。いわゆる「動物むかし」に受けつがれる。「かわうそと狐」「さるかに」「かちかち山」などの比較的長いものが好まれるようになる。この頃になると、子どもは自然の草花や小動物・昆虫などを相手にして、遊びの世界に入って行く。子守唄の世界から、自分で自然を歌い上げて行く力も持つようになっていくから、呪文とも唱言ともつかたぬ「わらべうた」なども、見よう見真似でうたい始める。

蛙 蛙 奈良ゆきの蛙

立てりや東の空を見よ（奈良）⁽⁵⁾

という唄などは、民話の「京都の蛙と大阪の蛙」を彷彿させるわらべ唄になっ

ている。なるほど、この期の民話には「わらべ唄」と思われる唄が多く入りはじめ、その後、七、八才頃まで語られる本格的民話まで、この傾向は続いて行く。

「かちかち山」に例をとれば、

じいさんが山の畑で豆を蒔いているところに、狸がやってくる。

一粒まいたら 千なれ

二粒まいたら 二千なれ

と、じいさんが歌うと、狸が、

一粒まいたら くっされろ

二粒まいたら くっされろ

と、やり返す。やがてつかまった狸は、ばあさんを騙して殺し、ばば汁を作っ

てじいさんに食わせ、逃げながら歌う。

萎しないもしないも 道理がさ

むじな汁食うとて ばば汁食った

兎がその話をきいて、じいさんの仇をうってくれるといい、かちかち山につれ

て行き、狸の背中の中へ柴に火をつける。火打石をうちつけると、狸は何の音だろうというのに答えて、兎は、

あいつはカチカチ山の

カチカチ鳥よ

という。いよいよ柴に火がつく。

あいつはボウボウ山の

ボウボウ鳥よ

そして最後に兎の杉舟と狸の土舟を沼にうかべる。

杉舟　こんと行け

土舟　こんと行け

というと、「土舟は、ぎっくり割れて、沼に沈んで死んだけど。どーびんさんすけ」と歌う調子でしめくられる。

やがて、「動物民話」にも人間が登場し、人間と動物の交錯が見られるようになる。「花咲かじじい」「牛方と山姥」「古屋の漏る」など、化けもの話をも含めて、

動物と人間の、対立したり、交流したりしはじめる。道具立てもそろい、語りの時間もそれなりに長くなると同時に、直線的な単系の民話から脱皮して行く。「花咲じい」や「こぶとり」などに見られるような、意地わるであったり、食っちゃ寝の横着ものの隣の爺婆も登場して物語りも複雑さが加わり、民話に内在する倫理観も知的な要素を加えてくる。一人一人の人間本来の姿としての倫理観と共に、子ども集団として社会倫理も配慮されたものを考えさせるような形をとりはじめてくる。

五才前後になると、民話をもっぱら人間を主人公とした本格的な民話が語られるようになる。昔話研究家の間で「本格昔話」とが「完形昔話」と呼ばれるものことである。

《異常誕生譚》といわれる。桃から生まれた「桃の子太郎」をはじめ、「力太郎」「ごんび太郎」「田螺息子」「一寸法師」「子育て幽霊」などが男の子に人気があり、《継子譚》である。「糠福米福」「お糸唐糸」「手なし娘」や《異類婚姻譚》の「姥皮」のような情感に訴えるものは、涙を流しながら聞く女の子の民話であった。

《異類婚姻譚》として一括されている「蛇簪入」をはじめ「鶴女房」「魚女房」「狐女房」「天人女房」などは最も代表的な民話であり、構成がきわめてすぐれており、大人が聞いても遜色のないものになっているのは、その文芸性に由来するものと見てよいのではないかと思われる。これらの民話にも唄が入っているものも見られる。「糠福米福」「山田白滝」^{〔6〕}の中で歌われるのは、次のものである。

妹が歌を所望されて、

今朝たっだ 猫の糞^{かえし} ほやほやと

と歌うのに対し、継子の姉は歌う。

バンサラ ヤサラ

皿十山に 雪降りて

雪を根として 育つ松かな

また「猿簪入」の結びとして歌われるのは、

猿川に流るる命 おしまねど

あつたる娘 後家にするらん

というもので、動物民話の中にあるものにと比較するまでもなく、《異類婚姻譚》を聞く年令といったものも、およそ想像できるといえるものである。

この年代の子どもの遊びも、以前の、草花をとってきての遊びから、集団遊びや道具を使う遊びとか道具を自ら作って遊ぶまでに成長している。道具を作るということはアイデアを必要とし、自ら「知恵」を出し合わねばならないことである。ガキ大将は単なる遊びの大将であるだけでなく、山形などに見られるような「油っ子」をも含めた遊びの責任を負わねばならなかったのが、ガキ大将になることのできる資格であった。

「油っ子」とは、幼ないために、他の子どもと一緒に、同等に遊べない子どものことである。かくれんぼとか鬼遊びでは、「油っ子」は決して鬼にならないし、ままごとではどこに行っても客として遇されることになっている。そういった「油っ子」を含めて、子ども集団を遊ばせ、集団の一員として自分も楽しんで遊ぶだけの「知恵」がなければ、ガキ大将の資格が疑われる。従ってガキ大将は決して荒っぽい、力の強い者だけでなく、それ相応に知恵の持主でなければならな

かった。⁽⁷⁾

民話も、そういった年令にふさわしく、「知恵」のある、胆力のある、女の子の場合は他人にやさしくめんどろを見てくれる人物を自然に浮かび上がらせるようなものが多い。また知恵が悪知恵と対照化されて登場し、悪知恵が失敗に終るといった、または悪知恵を働かせることで道化じみてくる人物を描いて、笑話への傾斜を示しはじめる民話も入り込んでくることになる。また「動物民話」ではお互いがそれぞれ独立した人格をもった動物としての地位しか与えられなくなってしまい、これらの動物は道化的存在となつて、墮落してしまうか、大失策を演ずる役割しか与えられなくなってしまうところは、次の段階の「笑話」への橋渡しに他ならないといえるし、動物は、一步のいて人間にその場をゆずつているようにも見える。

語り手は、あるときには自分の知恵を誇らかに聞き手に披露することも許されるところであろうか、「古寺の怪」などはその好例である。

ある空寺に旅の雲水坊主が泊ると、化けものが次々にやってきて、問答で打ち負かそうとする。しかし雲水坊主は次々に化けものの正体をあばいてしまうという話であるが、その時の化けものは「東堂の狐」とうどう こ「西竹林の一鶏」さいちくりん いっけい「南池の大魚」なんち たいぎょ「北山岳の白骨」ほくさんだけ はくこつであり、それらはそれぞれ「東のお堂に住む狐」「西の竹林に住む盲目の鶏」「南の池に住む鯉」「北の山に埋まっているしゃれこうべ」であろうと、雲水から解かれてしまう。その時の問答は、語りの中では全くの謎ときのように楽しいものがある。⁸⁾

こういった問答の裏側には、実にすばらしい話としての構成があり、この民話の背景を考えると、たくみに細かい道具立てのあることに気がつく。そして化けものは恐れるに足らないという、男の子が持たねばならぬ胆力のことも教え、その上に、むずかしい漢字を教え、解く語り手の得意そうな顔がほの見えるような民話になっているといってもよい。

子どもが一つずつ自分のものにして行く知識というものは、十分な子どもの納得の上で得たものでなければならぬし、疑問や問題点を持ち、その問題を解決

しなければならぬという立場に立たされた時こそ、自分の本当の知識になるのであろうことを考えると、まず問題そのものに興味を持つことから始まるものでなければならぬ。そういった観点からすれば、民話は面白くなければならず、上から押しつけるものであつてはいけないのは当然であろう。

三、自立的集団の中の民話

十五才になった男子は、部落共同体では一人前の存在として認められ、若衆組に参加することになっていた。だが若衆組に参加するにはそれだけの力を自分のものにする努力をしなければならなかった。山形県や福島県北部では出羽三山詣りに行くことになっていたが、それをやるには一週間の行を、部落にあった行屋で積み、精進することになっていた。いよいよ導者に従つて山に出かけている間は留守居の家族はこれまた精進で、塩断ちや茶断ちなどをやって、無事の帰宅を

祈ったものである。そして山から帰ると、若衆契約が開かれて、正式に加入が認められた。⁹⁾長男だけが若衆契約に参加することになっていた地域では、山の神講には、二、三男も参加し、参加のしるしに、山の神に木で男根を新しく作って供えなければならなかったところも見られる。一人前として認められることは、一人前の仕事ができるということであり、縄ないをはじめ、藁仕事には細々とした仕事量があった。中縄なら三百尋、モトチは四本、カンベ縄は一本、草履・ワラジであれば十足、ジンベ・深靴は六足、丸ミノは三日に一つという具合であり、その他にも山仕事、草刈り、田うない、畑仕事などにもそれぞれの約束があったし、米搗きとか俵に米を詰める場合とか、田植や稲刈りにも、乾田と湿田でそれぞれ一人前の仕事量が決まっていたし、「米地藏」といって、重さ十八貫三百匁の石をもちあげられなければならないなどといって力くらべをした所もあった。女には女の一人前があり、男の八割の仕事量だとか、機織りや縫いものにも一定の仕事量があった。¹⁰⁾

こうした一人前の男になれるように、山形県南部の置賜地方では、十二、三才

頃から、三々五々、農家の「木小屋」と呼ばれる農具を置いたり、養蚕の際に使われる小屋に集まって、仕事を憶える習俗があつた。気の合つた連中が集まる地域もあり、部落毎に全員が集まるという地域もあるが、若衆としての年中行事や通過儀礼などの一部は、この木小屋で行なわれることもあつたし、奉公人なども村の若衆と同じように一人前の若衆として扱われる場でもあつた。藁仕事を主とするものではあつたが、農事の話合いや、中には川柳をひねる木小屋もあつたし、逆に花札や糸引きの博奕をやることも勿論あつたらしい。しかし部落の大人たちはそういう木小屋を黙認し、時にはエジコを作つたり、ミノを作るような、高度の技術を必要とする藁仕事のときには、顔を出しては教えるということもあつたという。

この木小屋での民話の伝承は、馬鹿智話や、和尚と小僧話から、さらに狡猾者の笑話、そして世間話から伝説にまで進み、話を競うことを楽しむことさえあつたという。目覚めた一部の者の間では、痛烈な風刺を楽しむものさえあり、それらの民話には義賊や怪盗譚も多く聞かれる上に、独特な藩制への批判まで現われ

た例が見られる。

山形県米沢市に城をかまえた上杉家の圧制に批判の目を向けた話が、この地に語り伝えられている「佐兵ばなし」に例をとってみると、小役人のずるさの裏をかいて、まんまと小役人を騙すという話が多く残され、それが実在の人物の逸話として語り継がれてきた。「酒の籠抜け」という話では、こんな風に語られている。⁽¹¹⁾

天領に家をもつ佐兵は、上杉領では禁制の酒を作る。まず新しい樽を作り、それに小便をつめて、酒をいっぱいひっかけて、番所にやってくる。小役人は佐兵の酒くさい息で、てつきり樽の中に酒が入っているものと見て、その樽を開けて柄杓にすくって飲んでみる。小便だと知って、怒りながら番所を通してやるが、次の日も堂々とやってくる。だが今度は酒を詰めてやって来たのだったが、小役人は、また騙されてはいけなと考えて、だまって通してやったので、佐兵は禁制の酒を持ちこんで大もうけする。

藩制に対する批判としては勿論十分なものでないが、「役人の頭を打つ」「十手

風を吹かす役人をこらす」「金を無心した浪人者を追返す」「御法度の米を持ち込むこと」などという題名からも想像されるように、藩の圧制への批判の芽が見られる。しかも「佐兵ばなし」が語られた地域には元禄年間と文久年間には、それぞれ高梨利右工門の強訴事件、屋代郷騒動が上杉家に対して行なわれていることも十分考慮する必要がある。

さらに「佐兵ばなし」は富裕階級に対するとき、小役人に対する以上に楽しい話として展開される。「しらみ五升の質入れ」では質屋に対し、「三味線を引きずる」では、遊びほうけている金持に、「菓子のみ食い」「旦那に行きたくない金」は御用商人に対する非難をこめて語られている。

こういった一連の世間話風の民話が、あたかも事実あったかのように語り継いできたのは、木小屋に集まった十二、三才から十五、六才までの若衆であったということであり、これは注目に価することであろう。だがここで考えておかねばならないのは、「動物民話」から「本格的な民話」へ、さらに「笑話」と、聞き手として育ってきた人々であったからこそ、単に一回限りの噂話とか世間話でなく、

一つの型をもった民話の語り手となり、さらに子ができ、孫が生まれるとき、すぐれた「動物民話」「本格的な民話」の語り手に成長していたのであろう。

民話の伝承は、勿論すぐれた語り手の血筋にもあろうし、根っからの民話好きであった人たちによって支えられたものであろうが、語り手を取りまく社会的条件も無視することができない。広島県の一宮神社の「ほらふき会」が節分の日に行なわれ、その最高者をテングといい、かつてはこの一宮神社で天明の一撥の相談がなされたという事例も忘れたくないものであるが、山形県の上山市檜下という宿場町でも、かつて正月十五日に、「ほらふき会」が行なわれ、それに勝つと、「ほらの吹く蔵」「うその語郎」と称号が与えられ、その者は一年間の藩の仕事であった煙硝作り、米俵の積み換え、助郷役の人足に出ることを免除されたということが知られている。¹²⁾しかし最も基本的なことは、民話自体の面白さであり、語り手の聞き手への配慮からくるものであったのではなかったろうかと思われる。

註

- (1) 詳細は「山形県西置賜郡飯豊町大平・新沼・高畑三部落の民俗調査」(『置賜の民

俗』第5号拙稿）を参照されたい。

- (2) 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話集』武田編（刊行会・昭和四五年）『とーびんと
工藤六兵衛翁昔話集』武田編（刊行会・昭和四六年）

- (3) 『日本昔話名彙』柳田国男（日本放送出版協会）『日本昔話集成』関敬吾（角川
書店）『昔話は生きている』稲田浩二（三省堂）『民話への招待』武田（米沢文化懇
話会）等参照。『雪の夜のとんと昔』江口文四郎（昭和三二年・自家孔版）

- (4) 『わらべ唄めるへん』武田著（明文社・昭和五一年）に詳述してある。

- (5) 『日本伝承童謡集成』第二巻 北原白秋編（三省堂）

- (6) 引用の唄は山形県東根市にて採集した「山田白滝」であり、滝口国也氏の援助を
得た。話者は八島与三郎氏である。「猿轡入」の歌は山形地方ではへさるさると流
るる命は惜しくない。後にお姫は泣くばかり（近きよ）など、人によって変形し
ている。

- (7) 「油っ子」については、江口文四郎氏の御教示もあり、私の子どもの頃の経験も
ある。

(8) 山形県内の「古寺の怪」の発掘は少ないが、この例は山形県西置賜郡飯豊町中津川の山口すえの氏の語りである。

(9) 『置賜の民俗』一号～六号の民俗調査によれば、置賜地方一円の習俗になっていた。

(10) 山形県米沢市周辺の一人前の調査による『置賜民俗記』武田（みどり新書）参照

(11) 「佐兵ばなし」は『木小屋話』武田（桜楓社）参照

(12) 「宿場町の佐藤家の伝承」『季刊・民話』第4号）所収

ねずみの角力とり

佐藤家の昔話（十一）

発行 昭和五十一年七月十日

編者 武田 正

山形県南陽市赤湯三二八〇の四

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

ねずみの角力とり 佐藤家の昔話(十二)

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十三年十二月二十日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

- 『西川町の昔話』(一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊)
『むかしあったけど』(一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市築沢の昔話』(一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市塩井の昔話』(一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(一)』(一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(二)』(一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊)
『安楽城の伝承(三)』(一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊)
『高畠町和田の昔話』(一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(一)』(一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(四)』(一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『及位の昔話(五)』(一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『佐兵ばなし』(一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊)
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話(一)』(一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊)
『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)
『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のこころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『佐藤家の昔話(一) 山形県上山市檜下』(一九七二年七月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鳥吞爺 佐藤家の昔話(二)』(一九七二年九月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話(三)』(一九七二年十二月発行、二〇一〇年七月再刊)

『天とひばり 佐藤家の昔話(四)』(一九七三年三月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『へらへら話 佐藤家の昔話(五)』(一九七三年七月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『夢のほたる 佐藤家の昔話(六)』(一九七三年十一月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)』(一九七四年十月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『蛤姫(上)(下) 佐藤家の昔話(八)』(一九七五年四月発行、二〇一一年七月再刊)

『おとぎり草 佐藤家の昔話(九)』(一九七五年七月発行、二〇一一年七月再刊)

『ゆき女 佐藤家の昔話(十)』(一九七六年二月発行、二〇一一年七月再刊)

『ねずみの角力とり 佐藤家の昔話(十一)』(一九七六年七月発行、二〇一一年十二月再刊)

『かみなが姫 佐藤家の昔話(十二)』(一九七六年十一月発行、二〇一一年十二月再刊)

『山鳥むかし 佐藤家の昔話(十三)』(一九七七年九月発行、二〇一一年十二月再刊)

『和尚と天狗 佐藤家の昔話(十四)』(一九七八年八月発行、二〇一一年十二月再刊)

『竜宮童子 佐藤家の昔話（十五）』（一九八〇年一月発行、二〇二一年十二月再刊）